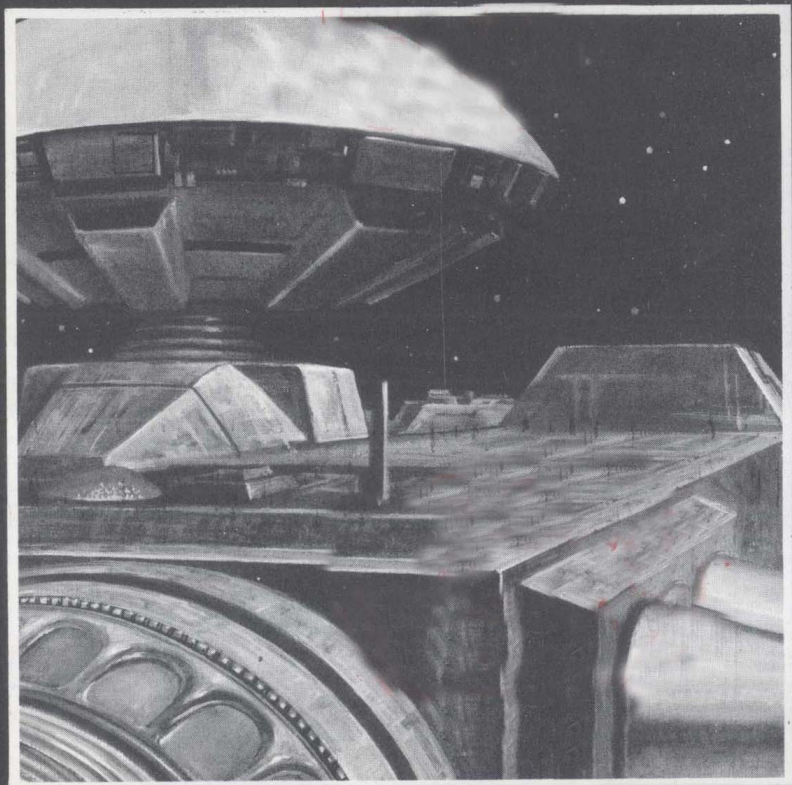


の秘宝



徳間書店

虚空王の秘宝Ⅰ

昭和五十三年七月十日 初刷

定価は帯、カバーに表示してあります

著者 半村 良

発行者 徳間 康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(43)六二三一(代表)
振替東京四一四四三九二番
(乱丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えいたします)

印刷・製本 凸版印刷株式会社

©1987 ryo Hanmura, Printed in Japan

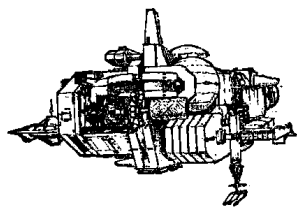
虚空王の秘宝Ⅰ

虚空王の秘宝Ⅰ——目次

第一章	迷路の街	5
第二章	秘密結社	27
第三章	影に棲む人々	49
第四章	戦士の掟	68
第五章	アンドロイド	90
第六章	聖地	105
第七章	出発	127
第八章	アステロイド	152
第九章	母星喪失	175
第十章	訪問者	199

装画・插画／加藤直之
デザイン／矢島高光

第一章——迷路の街



1

露木一郎がその災難からまぬがれたのは、まったくの偶然であった。彼は全国的に名を知られた建設会社の設計部に籍を置いた若手の技術者だが、前の晩からひどい下痢をしていて、昼少し前にとうとうたまらず、早退して家へ戻ったのだ。

そのことが偶然であったのはたしかだが、災難をまぬがれたといっても、決してそれが幸運であったとは言い

にくく、そのあとも同じ災難に追いまわされることになる最初の事件にすぎなかった。

同じように言葉の意味をもっと限定すれば、全国的に名の通った建設会社と言っても、決して大手というわけではなかった。業界の順位で言えば二十何番目かで、ただその会社が手がける工事が、みな特殊で風変りなものばかりだから、人々に名を知られているのである。それに露木が設計部に籍を置いているからと言って、建築物の設計者ではないのだ。その会社が特殊で風変りな工事を専門にしているから、設計部には通常の建設会社には

ない建設用機械類の設計者たちが存在しているのであった。その若手の一人が露木一郎なのだが、若手と言ってもすでに三十二歳である。同じ課には二十八の男が一人と三十代の男が二人いるし、町へ出ればその露木をオジサンと呼ぶ娘たちだっている。おまけに、下痢をしたと言っても何か腐りかけたようなものを食べたせいではなく、実を言えば前の晩、いや明け方近くまで悪友たちと飲み歩いて、二日酔をしていたのだ。水割りを飲みすぎて腹を冷やし、下痢症状を呈していたのはたしかだが、それは早退の口実のようなものだ。呑ん兵衛だらけの社内、まさか二日酔だから早退させてくださいとも言えなからう。

いちいち言葉にこだわると話が長くなる。早い話がひどい二日酔でとても仕事をする気になれず、適当に口実を作って早びけしたわけだが、二日酔などというものはいくらひどくても時間がたてばたいい治ってしまう。まして露木はまだ若く、肝臓だってそうくたびれてはいないから、会社を出て電車に乗ったり歩いたりしているうちにだんだん気分がよくなって来て、小田急線の豪徳寺駅を出た頃には、なぜ会社をサボったのか自分でもよ

く判らないくらいになっていた。

しかしとにかくそこまで戻って来てしまったのだから、一応自分の部屋へ帰ることにして、ぶらぶらと歩いて行った。

露木のすまいは2DKの部屋で、駅から五分ほど歩いたところにある小さなマンションの三階にあった。通勤には使っていないがフォルクスワーゲンを持っていて、マンションの北側の駐車場に駐車スペースも借りてあり、35ミリのカメラが二台にステレオ、テレビ、ビデオデッキ、16ミリのカメラと映写機一式、プリンターつきの電卓……服が夏冬あわせて十四、五着に靴が六、七足あって電話はプッシュホン。つまり独身貴族というわけで、特殊建設機械の設計者だから給料もちょっとしたものなのだ。それだけに、自分の住んでいる部屋には愛着があり、夜遊びも久後に落ちはしないが、帰れば帰ったで結構楽しめる生活であった。

その部屋の窓が、三百メートルくらい先から見えるのである。いつもは帰りが夜だから、両側の部屋の窓の灯りで見当をつけるわけだが、その道へさしかかったのは正午を一分ほど過ぎたところで、道に向けて置かれた商

店のテレビには、NHKのアナウンサーの顔が映っていた。

露木はそのテレビをちらりと見てから、前方の自分の部屋の窓へ目を移した。当然見なれた眺めなのだが、ちょっと眉を寄せた。カーテンがあいているのである。その窓は西に面していて、夕方になるとともに西陽を浴びるのである。今はまだそうでもないが、夏になると西陽のせいで室内の温度がいやに高くなり、夜帰ったときムッとするばかりか、レコードのジャケットがくっついたりする被害があるので、去年カーテンレールを二重にし、厚い遮光カーテンを外側に加えてあった。

それ以来、出勤する時は必ずその遮光カーテンをしめて部屋を出る習慣がついて、今朝もたしかいつも通りにして出たはずだったのである。

それが半分あいているらしい。内側のカーテンは薄手のブルーの生地で、そのブルーがちらちらと見えるのである。

二日酔いからしめ忘れたのかも知れないが、露木はなんとなく嫌な気がした。湯沸器のコックをしめ忘れたり、ステレオの電源を切り忘れたりするのは、独り者にとっ

て一番気をつけねばならぬことなのだ。設計をするだけに露木は各種の機械類の操作にも慣れていて、そういうチェックについては人一倍几帳面だと自負していたから、カーテン半分でもしめ忘れるなどということは、自尊心が傷つくのである。

露木は少し足を早めた。途中に小さな郵便ポストがあって、窓からそこまでがちょっつきり百メートルであることを、望遠レンズでたしかめてあった。そのポストの前へ来たとき、また窓に目をやった。

カーテンはしまっていた。内側のブルーが見えなくなっているのだ。露木は思わず目をしばたいた。さっきのは錯覚だったのかも知れないと思った。しかし、たしかにブルーのカーテンを見た記憶があった。慣れているから階数を間違えるはずはないし、上下左右の部屋に同じブルーのカーテンは引かれていなかった。

泥棒……。

一瞬露木の頭にそんな疑いがかすめた。まさか、と思う一方で、こん畜生めという腹立ちも生じていた。どれもこれも選り抜いて買ったものだ。見る目のある奴がその部屋へ入ったら、主の趣味のよさに敬意を表すること

は間違いないと自負しているのだ。万一その聖域を土足で侵されたとしたら……。

露木は小走りになった。マンションの入口は東側で、道からはちょうど建物の半分だけまわり込むことになる。その入口へついて突き当たりのエレベーターを見ると、ランプは七階で光っていて、上向きの矢印がついていた。露木は管理人室の横の階段を駆け上がり、三階の通路へ出ると大きく息を吸い込んで足どりをゆるめた。万一自分の部屋のドアから出て来る者がいたら、物も言わずにまず一発お見舞してやる覚悟だった。

2

ドアはしまっていたが、露木は油断しなかった。ポケットから鍵をとりだして錠を外すと勢よく一杯に引きあけ、すぐには入らずにしばらく中の様子を窺った。二つ先のドアがあいて、男の子を連れだ女が通路に現われると、露木の顔を見てにこやかに笑った。露木も笑顔を作ってそれにこたえる。別に言葉は交さない。マンションの隣人なんて、その程度のものだ。

その母子の邪魔になるので、露木は部屋の中へ入った。ドアをしめると二人の足音が背後を通り抜けて行った。人の気配はなかったが、露木はまた眉を寄せた。何か自分のものでない匂いを感じたのだ。靴の匂い、とても言ったらいいだろうか。脂とやにの入り混ったごく微かな匂いだ。

が、それも気のせいと言えば言えなくはなく、靴を脱ぐのに体を動かしているうちに消えてしまった。カーテンはぴたりと閉じていて、部屋の中は真っ暗だ。露木の指先がまっすぐに右の壁のスイッチに伸びて、パチリと音をさせる。

見慣れた部屋が、朝出て行った時の通りになっていた。しかし、もう三年も出入りしているその部屋で、今日のように妙な緊張感を味わったのははじめてだった。

「おかしいなあ」

露木は誰もいない部屋でそう呟いた。窓際へ行って二重のカーテンをそっとつまみ、その隙間から外をのぞいた。別にとりたてて異常はなく、ポストとマンションの中間あたりに停めてある車へ、二人の男が乗り込むのが見え、その車が走り始めると、左のほうからさっきの

母子が道へ出て駅のほうへ行こうとしていた。男の子は三輪車に乗っている。

露木はしばらくそうやって外を見ていたが、根負けしたように一気にカーテンを引きあげた。部屋の中が明るくなる。その窓を背に今度は室内をじっと観察しはじめた。露木は生来几帳面で綺麗好きだから、カメラや目覚まし時計のたぐいも、きちんと定位置に置かれていて、少しでも他人がいじった形跡があればすぐ判るのだ。

が、新聞からガラスの位置まで、今朝自分が置いたのと変りはなかった。

「なんだ」

露木は急に肩を落すと、そう呟いてまずネクタイを外した。ついでにワイシャツのボタンを四つ外し、衣裳簞笥の前へ行つて上着を脱ぐと、扉をあげてそれをハンガーにかけ、ベルトを外してズボンを脱ぎ、それともいねいにハンガーにかけた。

靴下も脱いでブリーフひとつになった露木は、冷蔵庫のドアをあけてコーラの瓶をとり出すとその栓を抜き、グラスについて左手に持ち、ソファアームへ向かった。

客用の家具類は何ひとつ置いてない。2DKと言って

も、ベッドを使っているから寝室に一部屋は潰れてしまいい、ステレオだのサイドボードだのと持物が多いから、ゆつたりとしたソファアームをひとつ置いただけで、すでに潜水艦の内部のような感じになっている。

露木はそのソファアームに坐って冷えたコーラをひと口飲んだあと、グラスを左手に持って右足を膝の上にあげ、のぞき込むように足のうらを見た。はだしの爪先に何かへばりついたからである。右手でそのへばりついたものを取る。そばのテーブルの上の灰皿へそれを捨てようとして、急に手をとめると、顔の前へ持つて来てしげしげと眺めた。

また肩が寄った。

「何だ、これは……」

一度解いた警戒心がまた戻ったようであった。それはごく細長い三角形の紙であった。長さは十二センチほど太いほうの幅が約三ミリ。それがすうっと先ですばまって直角三角形になっている。

何かの載ち屑だ。露木はそう思った。紙質はかなり上等である。アート紙のようだ。露木は左手にグラス、右手にその紙をつまんであたりの床をキョロキョロと見ま

わした。床にはグレイのカーペットが敷いてあるが、足にへばりついたそれ以外には何も落ちていない。

「やっぱり変だな」

露木はそう言うのと膝にあげた右足をおろし、グラスを丸いテーブルの上へ置くと、紙きれをつまんで立ちあがった。そんな載ち屑を出した憶えは全然ないのだ。それに、この数カ月間、他人は一人として部屋に入れていない。

ひょっとすると、朝刊の折込み広告と一緒に部屋へ紛れ込んだのではないかと思ひ、露木はキッチンのおばに据えた小さなダイニング・テーブルへ近寄った。朝刊はその上に置いてあった。

露木は現場検証をする刑事さながらの慎重さで、どこにも手が触れぬよう注意しながら、じつとそのテーブルの上をみつめていた。

「あ……」

呆れたような声を出すと、ダイニング・テーブルの上の灰皿に顔を近づけた。それは直径十センチほどの丸いガラスの灰皿で、ソファのそばのテーブルにも灰皿が置いてあるが、おとといの晩洗ったままだから、まだ吸

殻は入っていなかった。だが、ダイニング・テーブルのほうでは、今朝一本吸った。吸殻は一本だけだ。

その位置が違っている。

今朝、椅子に坐ってトマトジュースを一杯そこで飲み、煙草を吸いながらざっと朝刊に目を通してから、二日酔いの頭をかかえるようにして出勤したのだ。左手で揉み消したから、フィルターの位置は椅子から見て八時か九時の方向になる。

ところがそれが今は一時の方角になっている。つまり、丸い灰皿の向きが、約一八〇度変えられているということになる。

誰かこの部屋へ入ったのだ。

露木は確信した。とたんに右手でつまんでいた一枚の細長い直角三角形の紙の意味が、ずしりと重くなった。

誰かがこの部屋に来て、テーブルの上の灰皿を動かしたのだ。動かしたのは、テーブルの上で何かしたからに違いない。いったい何をしたのだろうか。現在の灰皿の位置から考えると、何をしたのか判らないが、とにかくそこで何かをしたことを知られまいとしているらしい。最初にあった通りの場所へ置き戻しているのだ。ただ、

僅かにやり損って吸殻の位置を逆にしてしまっている。

露木は氣味が悪くなった。もしもその通りだとすれば、何の変化も認められない自分の部屋が、実はついさっき何者かの手で何から何まで触れられた可能性があるのだ。その痕跡がないだけに、無気味な悪意が感じられて来る。露木は右手につまんだ紙をまた眺めた。匂いも嗅いで見る。紙に定規をあて、鋭利な刃物でも切断するようなとき、よくそんな形の截ち屑が生ずる。ダイニング・テーブルの上で何かしたとすれば、紙を切るような作業が最も考え易くはないだろうか……。

泥棒が紙を切る。いったい、そんなことが考えられるだろうか。現金など置いてはいないし、預金通帳は会社のデスクの中だ。金に縁のある紙といえばその程度だが、なぜ紙を切るのか見当もつかない。が、とにかく誰かが忍び込んで、そのテーブルで紙を切って行ったようなのだ。

露木はそう推理し得る証拠である紙きれを灰皿のそばへそつと置くと、あらためて部屋のチェックをはじめた。露木はそういうことをやりはじめると、徹底的にやるほうだった。まずドアの錠の瑕の有無からはじめて、寝室

から簞笥の中、キッチンの中、棚や冷蔵庫、居間から状態に至るまで、気がすむまで調べあげた。

3

いつの間にか二日酔いも完全に治っていたが、二時間以上かけても部屋の品物に異常は認められなかった。気がついたのは一台のカメラの電池が切れてしまっていることで、つまりそれほど徹底的に調べたというわけであった。勿論、屑籠などの中にも、同じような紙の截ち屑はなかった。

いったいこの截ち屑はどこから来たのだろうか……。露木は部屋の中を調べ尽すと、またソファに沈み込んで、細長い紙きれをみつめながらそう考えた。今朝の朝刊はドアの新聞受けからダイニング・テーブルへ直行しているから、仮りに新聞について紛れ込んだものであるとしても、ソファのあたりの床に落ちるわけではないのだし、帰り路で服について来たとしても、部屋へ入ったあとの行動を辿れば、同じようにソファの近くへは裸になるまで寄っていないのである。

どんな紙だ。何に使われる紙だ……。

露木は部屋へ戻ったときに感じた微かな匂いを思い出しながらそれをみつめ続けた。

この部屋にある紙で、これと同じものは……。

露木の目が居間の隅の書棚へ移った。世界科学大百科事典。全三十六巻のその事典が、一緒に買った専用書架に並んでいた。

「そうだ」

露木はソファから立ちあがると、またその紙きれをダイニング・テーブルの上へ置いて、世界科学大百科事典の専用書架の前へ行った。第一巻を抜き出して紙質をたしかめる。同じ紙らしい気がした。

「こん畜生」

露木はそう言うのと、丹念に一冊ずつ調べはじめた。専用書架は縦長で四段に仕切られ、一段に九冊ずつ、きちっと詰め込まれていた。

「あ……」

三段目の五冊目を引き抜こうとした露木は思わず叫んだ。二十二冊同じことを繰り返し続けたから、引き抜くときの手応えは充分判っていたが、なぜかその二十三冊目が

ずしりと重かったのである。

中腰になり、ゆっくりと両手でそれを抜いた。爆発物でも扱うように、そっとそのままテーブルへ移し、恐る恐る開いた。

「うへ……」

ワルサー・P 38。

ひと目で判った。事典のページが見事にえぐられて、すっぽりとその物騒なしろものが納まっている。

「本物か……」

取りあげようとして怯えたように手を引っこめた。どうやらモデルガンではなさそうだった。

「誰がこんなことを」

露木は嘆くように言い、急いで寝室へ行くと、手袋をはめながら戻って来た。

「冗談じゃねえぞ」

もう一人ごとを言っていることすら意識にはなく、手袋をはめた手でそっとページをひとつまみ持ちあげた。とたんにヒラヒラと、足にへばりついたのと同じ形をした截ち屑が四、五枚、テーブルの上に舞い落ちた。

「本物だ」

露木はずっと以前、モデルガンに熱をあげたことがあって、ワルサーの扱いにも慣れていた。銃把の下幅一センチほどの刻み目のある金具を押すと、カチンと音がして弾倉が五ミリほど飛び出した。それをそっと引き抜く。弾倉の七つの丸い窓が六つ弾丸でふさがっている。一発はすでに薬室に入っているかもしれない。

何度かためらってから、露木は思い切って左手で銃把を持ち、右手で遊底を引いた。中はからっぽで、弾倉を抜いた銃把の空洞が、かえって無気味な感じであった。遊底を元に戻すと撃鉄があがっており、こわごわ引金を引くと、カチッと小気味よい音がして撃鉄が閉じる。

露木は溜息をついた。

「念の入ったことをしやがって」

誰がしたことか全然心あたりはなかった。ただの悪戯いたづらではあり得ない。何しろ本物の拳銃なのだ。

誰かが隠し場所に困って……。

そう考えるのが一番妥当なようだったが、留守の間に合鍵か何かで、錠を少しも傷つけずに忍び込んだ手口は、尋常ではなかった。

露木はその物騒な物を、とりあえず元の通りに事典へ

収めようとしたが、弾倉を銃把へ戻す気にはなれず、そのままテーブルの上へ置きはなした。

「もうないだろうな」

また呟きながら、二十四冊目の事典へ手をかけた。

「糞つたれめ」

二十四冊目を開いた露木は、半分泣き声になった。そのページもえぐられていて、今度は五センチ角ほどのビニール袋が埋め込まれていた。中身は白。

「くすりだ」

露木はそれと拳銃を交互に見た。たちの悪い悪意のかたまりであった。実弾六発入りの本物の拳銃がそこにあるからには、ビニール袋の白い中身は、麻薬にきまつたようなものであった。

誰がどうしたことであろうと、こんな物は自分から遠ざけねばならない。

露木はそう決断した。早いところどこかへ捨ててしまうに限る。探したあとで誰かがどれほど困ろうと、断わりもなく自分の部屋へこんな物を隠す権利はないにきまつている。

裸のままだった露木は、急いで服を着に寝室へとび込

んだ。

4

露木は銃と白い粉の入ったビニール袋をデパートの紙裂にいれると、部屋を出て自分の車に乗った。どこかの橋の上から川のまん中へ捨ててしまう気だった。

しかしいざ車を走らせてみると、今どき真っ昼間物を投げ捨てられるような橋などあるわけがないことに気付いた。どこへ捨てるにせよ、暗くなるまで待たなければならなかった。

それに、もう一つの可能性に気付いてからは、尾行する車がないかもたしかめはじめた。もう一つの可能性というのは、隠し場所に困った者が露木の部屋を無断借用したのではなく、露木を罪におとすために隠していったのかも知れないということであった。

露木はあてもなく車を走らせ続けた。急に脇道へ入ったり、高速道路をぐるぐるまわったりしたから、もし尾行車があったとしても、とうに撒いてしまったと確信できる頃、やっと暗くなった。

露木のフォルクスワーゲンは、午後七時近くに勝鬃橋を渡り、車が疾走して行く以外に人影もない小さな橋のまん中で、やっとのことで問題のお荷物と縁を切ることができた。

世の中にはこういうこともあるのか……。

それがわが家へ戻る途中の露木の感想であった。誰にだって、それほどたちの悪い憎まれかたはしていないはずだった。しかし事実は事実、もし今日二日酔で勤めをサボらなかつたら、あのカーテンの動きも見ることにはなく、いつも通りに泰平至極に危険なしろものと一緒に夜を過しただろう。そのうち誰かが警察へ密告したりして、それを警官が信じ込みでもしたら、銃と麻薬を持っていて自分は、どうにも言いのがれのできない羽目に陥るのだった。

あの二人連れが怪しい。

露木はカーテンの隙間から見た、黒いクラウンへ乗り込む二人の姿を思い出していた。マンションの入口へ入るには、道から建物の北側をまわって行くのが普通だが、あの三階の母子のように南側の細い出入口を使うこともできるのだ。そちら側は自転車置き場になっている。あの